

「主の栄光が現れる」

出エジプト 14 章 10-18 節。

「ファラオは間近に迫っていた。イスラエルの子らは目を上げた。すると、なんと、エジプト人が彼らのうしろに迫っているではないか。イスラエルの子らは大いに恐れて、主に向かって叫んだ。

そしてモーセに言った。「エジプトに墓がないからといって、荒野で死なせるために、あなたはわれわれを連れて来たのか。われわれをエジプトから連れ出したりして、いったい何ということをしてくれたのだ。

エジプトであなたに『われわれのことにはかまわないで、エジプトに仕えさせてくれ』と言ったではないか。実際、この荒野で死ぬよりは、エジプトに仕えるほうがよかったのだ。」

モーセは民に言った。「恐れてはならない。しっかり立って、今日あなたがたのために行われる主の救いを見なさい。あなたがたは、今日見ているエジプト人をもはや永久に見ることはない。

主があなたがたのために戦われるのだ。あなたがたは、ただ黙っていなさい。」

主はモーセに言われた。「なぜ、あなたはわたしに向かって叫ぶのか。イスラエルの子らに、前進するように言え。

あなたは、あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に伸ばし、海を分けなさい。そうすれば、イスラエルの子らは海の真ん中の乾いた地面を行くことができる。

見よ、このわたしがエジプト人の心を頑なにする。彼らは後から入って来る。わたしはファラオとその全軍勢、戦車と騎兵によって、わたしの栄光を現す。

ファラオとその戦車とその騎兵によって、わたしが栄光を現すとき、エジプトは、わたしが主であることを知る。」

はじめに。

「こんなことになるとは思わなかった！」「なんてこったい！」

モーセに導かれてエジプトを脱出したイスラエルの民が、エジプトの軍隊に追われて叫び声をあげています。

「こんなことになるのなら、エジプトの奴隷でいたほうが良かった！」

エジプトから出発するときには、「主が力強い御手によって、私たちが奴隷の家、エジプトから導き出された」と、イスラエルの民は神様の力に信頼し、「さあこれからだ！」、「私たちはいよいよ奴隷から解放されるのだ！」と、明るい未来を期待していたのにも関わらず、モーセに導かれた先は海辺だったからです。

出エジプト記 14 章 9 節。

「エジプト人は彼らを追った。ファラオの戦車の馬も、騎兵も軍勢もことごとく、バル・ツェフォンの前にあるピ・ハヒロテで、海辺に宿営している彼らに追いついた」

私の実家は横須賀にあります。三浦半島の山と海に囲まれた環境で小さいころから育ってきましたので、山があってトンネルがあって、海があって、潮の香りがするのが当たり前の環境でしたので、5年前に茨城に来て、関東平野に筑波山がそびえ立つ景色には驚きました。

私は小さい時から、海辺のある生活が当たり前でした。子どもの頃は、夏になると家から水着を来て、自転車にまたいで、海に遊びに行きました。

青年時代には、夜の海辺で時間を過ごすこともありました。24 時間営業ではないコンビニのあるその海辺で、仲間とたむろして、わいわい騒いだり、ときには孤独に遠くの海を見つめながら将来のことを考えたりなんかして。「自分はこれからどうしたらいいのだろうか」。そんな海辺の青年時代でした。

海辺にたたずんでいた 15 年前のクリスマス。不思議なクリスチャンとの出会いから教会へと導かれて、イエス・キリストと出会い、そして先の見えない暗い海に進むべき道が開けたのです。

神様の導きはなんて不思議なのだろうかと思います。

旧約聖書の時代、イスラエルの民も神様の不思議な導きを体験しています。

1. 主に導かれる民

出エジプト記 14 章 10-12 節。

「ファラオは間近に迫っていた。イスラエルの子らは目を上げた。すると、なんと、エジプト人が彼らのうしろに迫っているではないか。イスラエルの子らは大いに恐れて、主に向かって叫んだ。

そしてモーセに言った。「エジプトに墓がないからといって、荒野で死なせるために、あなたはわれわれを連れて来たのか。われわれをエジプトから連れ出したりして、いったい何ということをしてくれたのだ。

エジプトであなたに『われわれのことにはかまわないで、エジプトに仕えさせてくれ』と言ったではないか。実際、この荒野で死ぬよりは、エジプトに仕えるほうがよかったのだ。」

神様に導かれるイスラエルの民がいました。エジプトに入ったときはヨセフの家族 70 人。それから民は増え続けました。エジプトのファラオに奴隷生活を強いられながらも、エジプトを出るときには男だけで 60 万人。女性や子供まで合わせると 200 万人の民となりました。

神様にはイスラエルの民をエジプトから連れ出し、約束の地カナンへと導く計画があったのです。

奴隷状態であったイスラエルの民がその苦しみのゆえに助けを求める声をあげたとき、神様の救いの計画が動きだしました。

しかし、神様に救い出されて、モーセに導かれて、新しい歩みをはじめてすぐに、イスラエルの民は不信仰の叫びをあげることになるのです。

出エジプト記 14 章 10 節。

「ファラオは間近に迫っていた。イスラエルの子らは目を上げた。すると、なんと、エジプト人が彼らのうしろに迫っているではないか。イスラエルの子らは大いに恐れて、主に向かって叫んだ」

私たちの信仰生活はどうでしょうか。「神様に救われて、イエス様を信じて、これからは信仰をもって生きていく」。そのように思っている、自分の思い通りにならないこと、どうしようもないことが起こってしまう。クリスチャンになって、神様に守られてもう大丈夫だと思った矢先に、問題や困難に直面するのです。

イスラエルの民のように恐れて、叫びながら、クリスチャンになる前のほうが良かったと思ってしまうことはないでしょうか。神様に導かれる旅よりも、昔のあの場所にとどまっていたほうが安全だったのではないかと考えてしまうのです。

私も洗礼を受けて救いの喜びに満たされている時間というのはほんのわずかで、「思っていたクリスチャン生活とは違うんですけど」、というようなことを先輩のクリスチャンと話をすることがありました。

しかし、しばらく時間がたって振り返ってみますと、「神様が導いてくださったのだな」、「確かに神様のめぐみと祝福があった」と神様の不思議な導きに感謝し賛美をささげるしかないということを繰り返し経験してきました。

15 年間、私の信仰生活が確かに導かれてここに立っているのだと告白することができます。

横須賀の海辺から、筑波山のふもとまで導かれてきました。まるでイスラエルの民が救い出されて、海を渡って、シナイ山へと導かれるかのように。

しかし、イスラエルの民は、シナイ山の後に、不信仰のゆえに荒野の 40 年を経験しますから、私はどうなるのだろうかと思うことがあります。

この先どうなるのかはわかりませんが、確かに今日まで神様に導かれ、めぐみ教会に導かれて 6 年。今年、2020 年も神様に導かれた 1 年間でした。

「こんなことになるとは思わなかった！」「なんてこったい！」

年明けから、新型コロナウイルスの感染拡大のニュースが溢れかえり、ウイルスは世界に広がり、いまだに日本でも感染が収束することなく、2020 年が終わろうとしています。

毎月の楽しみであった、喜楽希楽会の食事も無くなりました。喜楽希楽サービスの方々と楽しみにしていた、人生 2 回目の東京オリンピックも無くなってしまいました。個人的には、東京オリンピックがなくなったのは良かったのですが、めぐみ祭りや教会のイベントが無くなってしまったのは本当に寂しかったです。

1 年間、イスラエルの民のように、不信仰に陥り、恐れや不安、そして怒りによって、不平や不満を叫んでしまうような私たちでした。しかし神様が確かに守り導いてくださった 1 年間でした。

「エジプトにいたときのほうが良かった」と叫ぶイスラエルの民のように、「去年のほうが良かった」と叫びたくもなりますが、神様の偉大なご計画の中に無駄なことは何もなく、私たちが前に進むために導かれたこの 1 年の恵みと祝福に目を向けたいと思います。

私は福祉主事として、喜楽希楽サービスの職員の方々に月に一回、みことばを分かち合う機会があるのですが、この 1 年間に分かち合ったみことばを振り返りながら、考えたこと、思ったことを思い出してみました。

とにかく今年は、感染対策に気をつけながらも、クリスチャンの職員として「何を大事にすれば良いのか」、「何を見るべきか」そして、「どうあるべきか」を祈り求め、思い巡らす 1 年間でした。

1-1. みことばと祈りによって

まずは何よりもみことばと祈りによって導かれる 1 年間でした。

昨年の喜楽希楽サービスの運営委員会で、職員の方々が日々の業務で忙しく過ごす中で、霊的に飢え渴いているのではないかという話がありました。

そこで、職員のための聖書通読表を作って、朝のミーティングの時間やそれぞれの時間に、その日の同じみことばを受け取って、そして祈って仕事をするということをちょうど今年から始めたのでした。

それから、新型コロナウイルスの感染対策や様々な対応で業務が忙しくなったり、気を使うようになり、また経営的にも厳しくなる中で、今年からはじめた聖書通読が職員の信仰の支えとなりここまで喜楽希楽サービスの働きが守られたのではないかとと思います。

ダニエル 6 章 10 節

「彼は以前からしていたように、日に三度ひざまずき、自分の神の前に祈って感謝をささげていた」

今年はこれまでとは違った1年間でしたが、これまでと同じように、信仰を持って、みことばと祈りを大事にしていこうと、みことばによって励まされた1年間でした。

1-2. 喜びを与えること

しかし、いつまで感染対策を続けなければならないのかと、心の弱い私たちはストレスで、余裕がなくなり、人に優しくすることを忘れてしまいます。

そんな私たちに対して、神様をみことばを通して、どんなときでも愛を忘れないように、人を喜ばすことを忘れないようにと気づかせてくださったのです。

それは早天祈祷会でのみことばでした。

3月から5月の間、日本でも新型コロナの感染がひろまる中で、申命記のみことばが与えられました。

申命記 24 章 5 節のみことばが心に留まり、そして、このみことばも喜楽希楽サービスの職員の方々と分かち合いました。

申命記 24 章 5 節。

「人が新妻を迎えたときは、その人を戦に出してはならない。何の義務も負わせてはならない。彼は一年の間、自分の家のために自由の身になって、迎えた妻を喜ばせなければならぬ」

感染対策に気をつけながら、3密を避けるように、人と接触を避けるように日々過ごすようになって、自分の身を守ることばかり考えて、人を愛すること、人を喜ばせることを忘れてしまいがちなときに、みことばを通して、どんなときでも、神を愛し、人を愛し、そして喜ばせることを忘れてはならないのだと気づかされました。

「迎えた妻を喜ばせなければならない」。これは新婚生活をする夫婦に対する教えであります。結婚生活において、この初心を忘れてはならないのだと教えられるだけでなく、神の家族である教会の交わり、職員の交わり、そして与えられているご利用者の方との交わりにおいて、家族として、共同体として、神様によって結び合わされた仲間として、たとえソーシャルディスタンスと言われても、新婚の夫婦のようにお互いを思いやり、愛し、思いやることの大切さを教えられたのです。

早天で使っているテキストにはこんなことが書かれていました。職員の方々にも紹介した文章です。

「しかし、結婚は長い一生の間、愛し、愛される人を探すことです。相手を選ぶときの知恵ある方法は、新婚旅行で一緒に楽しむ姿だけを想像するのではなく、病院のベッドで寝ている自分を看取ってくれる相手の姿を描いてみることです。全生涯をともにするという約束だという視点を持ってこそ、真の喜びを味わうことができるのです。あなたは年を重ねるにつれて、太ったり、病気になったり、髪の毛が抜けたり、白髪頭になったりするでしょう。あれこれと失敗し、配偶者をがっかりさせることもあるでしょう。しかし、結婚は約束だという視点は、配偶者同士が契約書どおりにできているかと点数をつけ合う審査員になることではありません。互いに献身的に愛し合い、仕え合えるのは、何かが得られるからではなく、ただ夫婦が一体であるからなのです」

ただ夫婦が一体であるから。ただ教会は一体であるから。ただ喜楽希楽サービスは一体であるから。全生涯をともにする、何があってもともにする。病気のときも、災いのときにも、共に愛し合うことの喜びがあるということを教えられました。

1-3. 世の光として輝くクリスチャン

東京オリンピックもなった夏。春から続く感染対策で、外に出ることもできないご利用者の方々は、本当に寂しそうでした。喜楽希楽会の方々にも連絡しましたが、「早くみんなで出かけたい」という声ばかりでした。

しかも、7月には曇り空が続き、豪雨災害もあり、梅雨明けも13年ぶりに8月になりました。

そんなときにこそ、なんとかイエス様の光、みことばの光が届いてくれたら良いなと思いつつ、喜楽希楽サービスのお昼の聖書の時間を続けてきました。

ピリピ書2章16節。

「いのちのことばをしっかりと握り、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は自分の努力したことが無駄ではなく、労苦したことも無駄でなかったことを、キリストの日に誇ることができます」

暗い世の中で、曇りがちな人々の心の中で、私たち自身が世の光として輝くための労苦をしているのだ。そして、無駄ではなく報いがあるのだとこのみことばを職員会議で分かち合いました。

「新しい生活様式」、「ニューノーマル」ということが言われるようになっていましたが、私たちの「新しい生活様式」、「ニューノーマル」はイエス・キリストと出会ってから始まっているのだ。新型コロナで新しい生活になったんじゃない。イエス様に出会って、信仰によって私たちは新しい生き方になっているんだと喜楽希楽サービスの職員とも分かち合いました。

私たちは、イエス様が共にいる平安を知っています。そして私たちは、コロナ禍の前から、イエス様がそうであったようにひとりひとりを尊重し、自立をサポートし、心とからだを支える仕事をしてきました。これが私たちのノーマルであり、生活習慣であり、すでに当たり前になっていることです。

そして今だからこそ、イエス様の愛と力によって、地域の人々の心とからだの健康を支える喜楽希楽サービスでありたいと思うのです。

私たちは世の光として、人々の心を輝かし、明るくし、どのような状況であっても、ひとりひとりをいきいきと生かす仕事をしたいと決意を新たにしました。

1-4. 貧しい心に訪れるクリスマス

そして迎えたクリスマスです。今年は喜楽希楽会のクリスマス会で鳥の丸焼きを食べる機会もなく、心の寂しさや貧しさを覚えるクリスマスでした。

喜楽希楽サービスでも今年1年間を振り返ると、デイサービスでは外出のレクリエーションがなくなり、森学やマナとの交流もなくなり寂しさを感じてしまう1年間でした。

しかし、イエス様は語りかけてくださるのです。

マタイの福音書 5 章 3 節。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」

私たちの心、ご利用者の方々の心について、職員の方々とも分かち合いました。体の病気は客観的に見ることができるが、私の心はどうだろうか。新型コロナウイルスは検査することができるが、人の心はどうだろうか。

介護の仕事をしていても客観的に体の状態を目で見たり、数値で見ることができます。傷がある、怪我をしている、病気になっているということは、どんな状態か目で見たり、レントゲンを使ったり、色んな数値を測って、客観的に見ることができます。老化についても、体力テストで数値を測って調べることができます。

でも心は、客観的に見ることはできません。心を見るにはその人の主観が大事なのです。そして、体の病気であっても、客観的な診断や治療だけでなく、その人にとっては主観的なものが加わってきます。病気を抱える人は、例えば不安な心になります。この不安は客観的に測ることはできません。

病気を治すだけであれば、客観的な治療が主になります。

しかし、生活（人生）を支える私たちの仕事は、相手の心（主観）を大事にしなければなりません。

コロナ禍の中で、ちゃんとマスクをしてるかどうか、手を洗ったか、あるいは感染対策の一方で、外出ができなくて、体力が落ちている。こういうことは客観的に見ることができます。

ですが、私たちが相手の心を見るということは、マスクをする生活で、どう思っているか、自由に外出できなくて、どう思っているか、主観的な思いを直接聞いたり、想像することです。

I サムエル記 16 章 7 節。

「人はうわべを見るが、主は心を見る」

病気、怪我を直す、感染対策だけが目的であれば、うわべだけの対応で良いのかもしれませんが。

しかし、私たちは、広く生活に関わる仕事をする者として、人々の心を見ることを忘れてはいけないと思わされるのです。

その人の心を知ろうとすること、理解しようとする事、その人の変化に気づくこと、想像力を持つこと。その人らしく生きることができるよう、その人の生活を支えること。コロナ禍であるからこそ、心の救いが必要です。心の救いはその人の生きる力になります。

なによりも私たち自身が、私たちの心を主に見ていただいて、癒していただいて、慰めていただいて、力づけていただいて、主によって与えられた信仰によって生きる者となり、信仰によって仕事をし、人を愛し、人に仕える者でありたいと思うのです。

そのようなことを考えながら、今年のクリスマスを迎えました。

このように今年1年間、みことばと祈りによって、神様に導かれて、守られて過ごすことができました。

そして、この1年間で教えられたことは、「主イエス・キリストこそが私たちの救い主である」ということです。

恐れる主の民を、主が救い出してくださるのです。

2. 万軍の主が戦われる。神の視点から見る事。私たちは沈黙する。

救い。

出エジプト記 14 章 13-14 節。

「モーセは民に言った。「恐れてはならない。しっかり立って、今日あなたがたのために行われる主の救いを見なさい。あなたがたは、今日見ているエジプト人をもはや永久に見ることはない。

主があなたがたのために戦われるのだ。あなたがたは、ただ黙っていなさい」

海辺に導かれたイスラエルの民は、追ってくるエジプトの軍隊に恐れて叫びました。

しかし、民のリーダーであるモーセは「恐れてはならない」と言いました。

「主の救いを見なさい」と言いました。

敵であるエジプト人を見るのではなく、主の救いを見なさいというのです。

私たちは今何を見ているのでしょうか。何を恐れているのでしょうか。

先が見えない中で、恐れと不安に押しつぶされそうになる中で、私たちが見るべきもの

は「主の救い」なのです。

「主があなたがたのために戦われるのだ。あなたがたは、ただ黙っていなさい」

恐れの中で叫ぶのではなくて、不平不満をつぶやくのではなくて、ただ黙って主の救いを期待しないさいと言われます。

今年、喜楽希楽サービスの聖書通読で読んだ詩編にも、ダビデの信仰がありました。

詩篇 27 篇 1 節。

「主は私の光 私の救い。だれを私は恐れよう。

主は私のいのちの砦。だれを私は怖がろう」

このようなダビデの信仰を私たちも持ちたいと思うのです。

3. 主の栄光のために

出エジプト記 14 章 15-18 節。

「主はモーセに言われた。「なぜ、あなたはわたしに向かって叫ぶのか。イスラエルの子らに、前進するように言え。

あなたは、あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に伸ばし、海を分けなさい。そうすれば、イスラエルの子らは海の真ん中の乾いた地面に行くことができる。

見よ、このわたしがエジプト人の心を頑なにする。彼らは後から入って来る。わたしはファラオとその全軍勢、戦車と騎兵によって、わたしの栄光を現す。

ファラオとその戦車とその騎兵によって、わたしが栄光を現すとき、エジプトは、わたしが主であることを知る。」」

モーセはその主のことばを聞いて、信仰によって海に向かって歩き始めます。

私たちもモーセのように、主のみことばを聞いて、みことばの杖を高くかかげて、信仰によって、前に進みたいと思うのです。そして私たちの信仰の歩みを通して、主の栄光が現わされ、偉大な神の力を全世界が知ることになるのです。

私たちをみことばによって導き、恵みを与えてくださる、救い主イエス・キリストが今も私たちと共にいてくださいます。

ローマ 5 章 2 節。

「このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいきます」

ただただ主の栄光だけが現わされる。新しい1年を迎えたいと思います。そのために主が戦ってくださるのです。私たちはみことばの約束にただ信頼して歩むのです。

出エジプト14章14節

「主があなたがたのために戦われるのだ。あなたがたは、ただ黙っていなさい」